

日本ロードレース界に

緊急対談

ヨーロッパで走らなければ
選手は強くなれない。
それは不動の原則だ！

自転車ジャーナリスト

栗村修

日本ロードレース界に陽は昇るのか。列島を揺さぶる熱狂のアラシは到来するのか——。

新城幸也、別府史之以来、日本ロードレース界は世界の檜舞台で活躍する選手を生み出していない。沈黙の時間が流れたままだ。

日本でスポーツサイクルを楽しむ人は増えている。大いに歓迎すべきことだろう。が、しかし、それだけでいいのか。答えはノーである。欧州のメジャースポーツである自転車ロードレースで気を吐く日本人選手が不在のままでいいはずがない。スポーツサイクルの発展にとって、レースシーンの沈滞は片肺飛行と言えるだろう。

日本ロードレース界に陽は昇るのか。列島を揺さぶる熱狂のアラシは到来するのか。本誌は積年の想いを込めて浅田顕、栗村修の両氏による緊急対談を企画した。日本ロードレースの将来を見据える2人が発した心の叫びとは——。
(司会進行:本誌高木賢)

日本ロードレースの将来について真情あふれる構想を披露した浅田顕氏(左)と栗村修氏

陽は昇るのか。

世界へ飛躍するには
UCIプロチームの創設が絶対条件

浅田 颯

日本ナショナルチームロードレースヘッドコーチ



浅田颯



選手育成に定評のある浅田颯氏

新城、別府の後に続く選手が不在

「空白状態を生んでしまったのは志を持ってヨーロッパに出て行くチームがないからです」

—日本のロードレース界から世界に通用する選手がなかなか出て来ません。新城幸也、別府史之の後に続く有望選手が出現していません。今年の東京オリンピックでもメダル奪取は絶望視されています。非常に残念な状況が続いています。どうしてそんなにしょうか。現状を打開し、世界に羽ばたく強豪選手を育成し、日本のロードレースを活性化させることは難しいことなのでしょうか。

うか。本日はそうしたテーマを踏まえ、ロードレースを愛するお一人に本音で語り合っていたきたいと思います。

栗村「まずは現状を整理してみます。日本のロードレースというのは本場のヨーロッパと比べると明らかにマイナーで、競技人口が少ないです。強い選手を生み出す基盤が脆弱であるというのが現実です。しかし、アジアの中で日本はトップ

クラスの地位を保っており、東アジアでは常にナンバーワンの地位を保持していることは間違いありません。日本はアジアの中で一番ヨーロッパに近い国と言えるでしょう。しかし、そうは言っても新城、別府の後に続く強い選手が出現していないことも厳然たる事実です。それはご指摘のとおりです。

新城と別府は日本のレースシステムの中から出てきた選手ではありません。彼らは浅田さんの取り組みとかヨーロッパチームとの橋渡しを通じて本場のレースシーンへ果立っていった選手です。特に新城はエキップアサダのチーム活動の中で成長した選手と言えるでしょう。そういう意味で2人とも特別なんですね。もちろん、新城、別府の活躍は彼ら自身の

浅田颯 (あさだあきら)

1967年11月、東京都出身。高校卒業後、日本国内、欧州で自転車ロードレース選手として活動し続け、1995年に引退。翌1996年からチームブリヂストン・アンカーの監督を務め、2006年にエキップアサダを設立。新城幸也、福島晋一・康司兄弟、清水都貴、宮澤崇史らの選手とともにチームごとツール・ド・フランスに参戦することを目標としてチーム活動を続けたが、資金難から2009年シーズンで欧州での活動を休止した。現在は日本ナショナルチームのロードレースレースヘッドコーチを務めるとともにU23チームのEQADSを率いる。同チームの運営会社は自ら代表を務めるシクリズムジャパン。



2011年ジャパンカップで激走する新城幸也（高木秀彰氏撮影）

才能、身体能力、そして努力に負うところが大きかった。そういった特殊事情を勘案しても我々は彼らに続く有力選手が出ていないという現実をしっかりと見据えなければいけません。これからは日本のロードレースシステムの中から世界に通用する選手を生み出すことが必要不可欠です。逸材を発掘し、育成していくシステムづくりが急務です」

浅田「シンプルなことなんです。新城別府の後に強い選手が出てきていないというのは、真剣な想い、志を持ってヨーロッパに出ていく選手、チームがないからです。それが一番の要因です。エキップアサダは独立プロチームとして2006年から活動を開始しました。日本のレースにも出場しましたが、ヨーロッパで評価される戦績を残すことに最注力しました。そして、それなりの手応えを残すことができたと思いますが、残

念ながらレース活動を継続することができませんでした。私達がチャレンジした活動は充分とは言えませんが、その後日本のチームで真剣にヨーロッパでの活動を目指したチームはありません。それが現実です。その結果が今の日本ロードレース界の沈黙につながっているのだと思います。ヨーロッパで走らなければ選手は絶対に強くなれない。それは不動の原則です」

「プロ選手として活躍するためにプロのレースに出場しなければ話にならない。答えはシンプルです」

日本ナショナルチームロードレースヘッドコーチ

浅田 顕

緊急対談

日本ロードレース界に
陽は昇るのか。

栗村 修

自転車ジャーナリスト

栗村「浅田さんがエキップアサダのレース活動を断念せざるを得なかったのは経済的な理由が大きかったわけです。ヨーロッパでチームとしての活動を続けるには資金の裏付けが必要です。そこにはいろいろのご苦労があったと思います。その一方で大門宏監督が続けてこられたTEAM NIPPPOの活動もひとつのやり方でした。大門さんはNIPPPOという企業のスポンサーと日本の選手をヨーロッパのチームと合流させて世界へのアプローチを進めていきました。しかし、そうした活動の中から新城、別府を超える選手は残念ながら出てこなかったですね」

「世界にチャレンジするチーム活動を続けていくためには数億円単位の資金が必要で

栗村修



鋭い視点に立って自説を展開した栗村修氏

しょうが、資金を出す企業は当然ながらそれに見合う価値というか、費用対効果を考えますよね。厳しい言い方も知れませんが、日本のチーム、選手が企業を説得するだけの力を持っていたかどうかということでもあるのではないのでしょうか。

栗村「日本のロードレース界にはチーム活動の資金集めをする営業力、プレゼン力が欠けていました。日本ほどではないにせよ、世界的に見てもそういうことは言えたのではないのでしょうか。それは実感としてありますね」

浅田「エキップアサダは2006年にコンチネンタルチームとして活動をスタートさせましたが、当初は年間1億円くらいの費用がかかりました。プロコンチネンタルチームに昇格するには年間

2億5000万円くらいは必要でしたが、けっきょくそれはできませんでした。今のUCIプロチーム(当時のプロコンチネンタルチーム)ですとそれでは足りませんが、当時はそれくらいでチーム運営が可能でした。

とにかくプロレベルのレースに出て活躍するためにはプロレベルのレースに出場しないと話になりません。それなりの土俵に上がらなくてはどうしようもないわけです。そうした活動を継続するにはどうしても活動資金が必要なんです。当時、ヨーロッパのプロレースで闘える選手はチームに6人いました。新城、清水都貴、福島晋一、康司兄弟、宮澤崇史、水谷壮宏の6名です。チームとして闘っていくには16名の選手が必要でした。他

栗村修 (くりむらおさむ)

1971年12月、横浜市に生まれる。高校中退後、フランスのナントに留学してクラブチームに所属。1996年にシマノレーシングに加入。1998年にポーランドのプロチーム「ムロス」と契約し、プロ選手として1年間活動した。2000年にミヤタ・スバルレーシングチームと契約し、2001年まで選手生活を続ける。2002年から2007年までにミヤタ・スバルレーシングチームの監督を務める。その後、2008年から2年間、シマノレーシングのスポーツディレクターに就任。2010年から2013年まで宇都宮ブリッツェンの監督を務め、現在は一般社団法人日本自転車普及協会主幹調査役としてツアー・オブ・ジャパンのディレクターに就任。J SPORTSの自転車ロードレース解説者としても知られている。

の日本チームの選手を合流させれば何とか形になると考えていましたが、資金的な壁に直面し、残念ですがツールを目指すとこのエキップアサダの活動を断念せざるを得ませんでした」

栗村「画期的だったのは浅田さんが2006年にチームを立ち上げた時、5年後の2010年にはツール(ド・フランス)に参戦するという壮大な目標を打ち出したことです。それまではどのチームも世界を目指して闘っていくといった漠然としたことしか言わなかったのですが、エキップアサダは2010年にチームごとツールに出るという明確な目標を掲げたんですね。それは衝撃的なことでした。」

それまでの日本人選手、日本チームの実績を考えればすごくハードルの高い目標でした。しかし、清水が2008年にパリ・コレーズでステージ優勝し、同

じ年に新城が(ツール・デュ・)リムザンでステージ優勝した時は、これは本当に行っちゃうのではないかと思いました。エキップアサダの快進撃に驚き、そして快哉を送った人は多かったです。冒險的なビジョンであってもしっかりと言葉に出し、明確な目標として掲げることによって言霊(ことだま)の力が存分に発揮される。私は当時、そんな想いを抱いたものです」

浅田「手応えはつかみかかっていたのですが、結局、私の運営的な未熟さが露呈してしまいました。2009年に新城がフランスのブイグテレコムに移るとチームの評価がが落ちしてしまいました。ブイグテレコムに行ったことで新城自身は成長していきましたが、エキップアサダとしては苦境に陥ってしまいました。かなりのスポンサーが引いてしまったので活動も大きく制限されることになってしまいました」

栗村「ブイグテレコムに移籍した新城は2010年のツール第11ステージで6位に入り、2012年のツール第4ステージでは敢闘賞を受賞しました。別府も2009年ツールで敢闘賞を受賞しています。それで我々の目が新城、別府という個人の方に行ってしまうね。彼らの活躍に注目するとともに第2、第3の新城、別府が出てくるはずだという期待が高まっていきました。しかし、現実はその甘くないということに気づかされることになりました」

日本ナショナルチームロードレースヘッドコーチ

浅田 顕

緊急対談

日本ロードレース界に 陽は昇るのか。

栗村 修

自転車ジャーナリスト



2010年ツール・ド・フランスに出場した新城幸也(右)と別府史之(岩佐千穂氏撮影)



2016年ジャパンカップクリテリウムで別府史之(中央)は優勝、連覇を飾った(中村賢二氏撮影)

緊急対談
浅田顕
日本シヨナルチームロードレースヘッドコーチ

日本ロードレース界に
陽は昇るのか。

栗村修
自転車ジャーナリスト



ツアー・オブ・ジャパンの激闘は毎年、ロードレースファンを熱狂させる(写真は2012年伊豆ステージのレースシーン)



2011年ジャパンカップで西谷泰治（中央）は大健闘の2位。右端は優勝したハース

「競争相手はヨーロッパで闘う相手全員です。本場で評価されなければプロにはなれない」

―繰り返しになりますが、どうして新城、別府の後が空白に近い状態になってしまったのでしょうか。

栗村「ひとつ言えることは、当時のヨーロッパのレース界の成熟度が低かったということですね。新城、別府にとってはそれがプラスに作用した面があると思います。近年、ヨーロッパのレース界はどんどんレベルが高くなってきています。ヨーロッパでプロを目指す選手はジュニア、アンダー23の時代から相当厳しい教育、訓練を受けています。鍛えられています。そういった状況の中で日本から身ひとつでヨーロッパに渡り、本場の壁を打ち破るといのが困難な状況になってきています。よほどすごい素質を持った選手ならば別かも知れませんが、徒手空拳でヨーロッパに渡っても言葉の壁、考え、生活習慣の違いなどを平気で乗り越えられる選手でないと通用しません。かつての市川雅敏さん、そして別府は個の力を発揮してヨーロッパで闘いましたが、現在ではそうした闘いを貫くというのがかなり難しい状況になってきているのは確かです。

新城の場合は個の力もさることながら

浅田さん、福島兄弟をはじめエキップアサダというサムライ軍団の中で素質を磨くことができました。素質にプラスして環境の面でも恵まれていたと言えます。今後、日本の選手がヨーロッパにチャレンジするには新城くらいのレベルの選手が5人、10人くらいいて、しかも世界に目を向けている指導者の下で力をつけ、ヨーロッパにチャレンジするといった体制づくりが必要だと思います」

浅田「残念ながらヨーロッパと日本では実力差が広がっています。それは事実です。なぜそうした状況になってしまったかと言えば、それはヨーロッパで真剣に闘う覚悟を持った日本のチームがなくなってしまったからです。エキップアサダは2009年にツールへ向けたレース活動を休止していますが、その後、ヨーロッパへ立ち向かう真剣な活動をしたチームはありません。残念なことですが、結局、日本からツールを目指すチームはひとつあればいいんです。そのチームに力のある選手を結集させ、ヨーロッパのレース界にチャレンジできる環境をつくるのが大切なことです」

栗村「私はかつて選手層の底辺を広げる



雨中戦となった2017年ジャパンカップのゴールシーン。優勝したカノラの右が3位の雨澤毅明

「世界を目指しているのか、世界を諦めているのか」

ヨーロッパを目指す気持ちがあるかないかです。国内にとどまっていたのでは絶対にはなれません」

栗村「サッカーのコートは大きいです。世界の中の国でも同じです。しかし、ロードレースはヨーロッパと日本ではレースの距離、コース設定がかなり違います。競争する選手の質、量も違います。サッカーで言えば、日本はフットサルのような感じなんです。考え方もそうです。選手として生き残っていくための気構えも違う。ヨーロッパではアマチュア時代から過酷な生存競争に打ち勝たなければなりません。戦場に行くような覚悟を持った走りを見せ、しかるべき結果を出さないと能力がある選手として認められません。

日本でも野球で甲子園、そしてプロ野球を目指すという選手は厳しい練習に耐え抜くことが不可欠でしょうし、選手間の競争を勝ち抜いていかなければなりません。試合では結果が求められます。自転車競技も同じことなんです。ですから、日本国内のロードレース界が常に問いかねばならないのは世界を目指しているのか、世界を諦めているのかということなんです」

浅田「サッカーのコートの話が出ました

が、たとえて言えば同じコートでもそこだけだけ激しいレースをしているかということ。競争の度合いが日本国内とヨーロッパでは違います。ヨーロッパを目指すのであれば、厳しい競争をしていかなければ先に進んでいけないんだということ。自覚しなければいけません。体力、素質、意気力のある選手が競争率の激しい中でしっかり競わないと何も生まれないのがロードレースの世界なんです」

——野球だけでなく水泳、バドミントン、卓球、スケートなどでは世界の頂点を目指すような選手が輩出しています。自転車競技でもトラックでは世界のトップクラスに追いついてきています。しかし、自転車のロードレースは依然として日本と世界との差が大きいままです。残念ですね。

浅田「トラックでは中野浩一さんがかつてプロスプリント10連覇を達成していますし、東京オリンピック開催が決まり、強化対策を推進してきたこの何年かで日本のトラック選手は世界を相手に実績を残しています。しかし、トラックはロードレースと比べると競技人口が少ないです。ロードレースとは競争率が全然違います。メジャースポーツの自転車ロードレースで世界のトップクラスと闘うとい

日本ナショナルチームロードレースヘッドコーチ

浅田 顕

緊急対談

日本ロードレース界に 陽は昇るのか。

栗村 修

自転車ジャーナリスト

という観点から国内の地域密着型チームを増やすべきだと考え、宇都宮ブリツェンの活動に参画していました。しかし、日本国内でのチーム活動の中から世界に飛び出す選手を育てるというのはかなり難しいことだということを悟らざるを得ませんでした。当時、私は日本国内で選手の底辺を広げ、その中から強い選手を育て上げるという考えを抱いていましたが、世界へのチャレンジという点では成果として実らせることができなかった。ファン層の幅を広げるという点では貢献できたと考えているのですが。宇都宮ブリツェンの雨澤毅明は2017年のジャパンカップで3位に入り、2019年に単身スロベニアのチームに移籍しましたが、結果として本場の壁に跳ね返され、選手生活を断念する結果となりました。彼が別のアプローチでヨーロッパに渡っていたら状況が違っていたかも知れません。彼には期待していたので、残念というか今でも口惜しい思いがありますね」

浅田「ロードレースで世界に通用する選手になろうとすれば競争相手は日本人ではありません。ヨーロッパで闘う選手が競争相手なんです。プロの世界で評価される場は日本にはありません。プロを指すのであれば、ヨーロッパで走るしかないんです。相撲で言えば地方巡業で強くても駄目なんです。本場所で成績を残さなければ番付も上がりません。ロードレースの本場所はヨーロッパなんです。



2013年、大分で開催された全日本ロードレースで新城幸也は雨中決戦を制して優勝した

うことは生やさしいことではありません。血のにじむような努力が問われるでしょう。だからこそ、必死の覚悟を持って取り組まなければ世界と闘うだけのレベルに到達することはできません。

とにかく強い日本人の選手を集めてヨーロッパで走る。それだけなんです。言い換えれば、それなくして世界と闘う方法はありません。アンダー23の選手は可能性を持った選手が育ちつつありますので、彼らが次なるステップに進むための受け皿が必要です。彼らがヨーロッパ

日本のロードレース界を発展させる仕組みづくり、世界を目指すコンセンサスづくりが急務

日本のコンチネンタルチームは有望選手の供給源

栗村「浅田さんはこうすれば強いチームをつくれるということがわかっていると思います。レース現場で経験を積んでこられていきますからね。とにかくヨーロッパを目指して選手を強化していくという価値観を日本のロードレース界に広げていくことが大切です。敢えて言わせてもらいますが、日本の地域密着型チームは個々に世界を目指すというスタンスではなく、素質のある選手を発掘し、育て上げるといふことに徹してほしいですね。個々のチームで世界を目指すのは限界がありますので、日本を代表するUCIプロ

を目指すにあたって日本国内でワンクックション置くためのチームが不可欠なんです。それがかつてのプロコンチネンタルチーム、現在のUCIプロチームです。チームのコンセプトとしてはギャラの高い外国人選手は必要ありませんし、日本人選手にターゲットをしばった混成チームにするわけですから活動費用は3億円から4億円くらいで足りるはずですよ。私はこの構想を実現することを常に考えています」

ロチームに強い選手を送り込むという考え方に専念していただきたいと思います。それならば個々のチームは小規模の予算でも運営は可能です」

浅田「日本国内に世界を目指すナショナルプロチームが不可欠です。ランクの高いチームです。しかし、今現在では日本国内にUCIプロチームに匹敵する選手がおりません、だからコンチネンタルチームにランクを下げなければならぬというのが現実です。ヨーロッパではコンチネンタルチームでも強いチームが多いですよ。日本人選手のレベルを引き上

浅田 顕

緊急対談

日本ロードレース界に 陽は昇るのか。

栗村 修

自転車ジャーナリスト



2010年ツアー・オブ・ジャパン富士山ステージで激走する福島晋一（右）

げるためにどうするか。それはヨーロッパで闘いを重ねていくしかないんです」
栗村「日本は経済的に恵まれていますので、国内のコンチネンタルチームは多少ゆるくても成立してしまうところがあります。自分達の城をつくり、そこにどまりがちなんです。チーム間でも横並び体質が出てしまう傾向があります。しか

し、そこに安住していたのでは選手としての進化を妨げてしまいます。競技選手としてやるならば世界を目指すということとを大前提にすべきなんです。

新城、別府がツールで活躍し始めた時、日本のロードレースは盛り上がりを見せましたが、今は熱気が引いている感じですね。この現状を何とか打破しなければい

エキップアサダリタインズはある!?

世界を目指す選手の受け皿づくりが必要不可欠

—エキップアサダリタインズはありますか。

浅田「そのためには強い選手をつくらなければいけません。選手は6年で強くなりません。新城も別府もそうでした。基礎体力があるということが前提としても、そういう若い人にロードレースという競技を選んでもらって、彼らを徹底的に鍛えていけば6年がかたができてきます。ずば抜けた選手が出てくるのもいいですが、全体の底上げがされないためです。その上で日本を代表するプロチームをつくり、強い選手を集めてヨーロッパで走り、結果を求めていくというシステムを確立しないと現状を打破することは難しいです。今の日本のエリート選手はコンチネンタルチームのレベルですが、若手選手が強くなった時のための一段高い受け皿づくりが大切です。日本を代表するUCIプロチームの発足です。そのための資金確保については一部スポンサー

資金、一部補助金、一部クラウドファンディングといったハイブリッド方式もひとつの方法です」

—繰り返しますが、日本のロードレース界に陽は昇りますか？

浅田「昇ると信じてやっています。自分でやるしかないと思っています。他の人は誰もやってくれないと思うので、自分がその役割を担う覚悟を固めています。時々、自分はおかしいのかと思う時があるのですが（笑）、ヨーロッパに行ってみるとロードレースの関係者と話をすると自分の方向性は正しいということを確認し、安心します」

栗村「今、日本のロードレース界が膠着しているのは事実です。浅田さんにはチーム運営、選手強化のスペシャリストとしての道を歩んでいただき、私は日本と世界のレースシーンを見つめながら日本のロードレース界を発展させるため

けません」

浅田「何度でも言いますが、日本でもUCIプロチームをつくって、ヨーロッパで闘う体制をつくるというのが必要不可欠事項です。そのためにはUCIプロチームに相応しい選手を育成することが第一です。それができなければ何も始まらない」

の仕組みづくり、調整役といった役割を担って貢献していきたいと考えています。浅田さんのチームに強い選手を送り込めるような土壌をつくるために努力していきます。命をかけて目標に向かっていく選手を後押しし、日本のロードレース界が世界へ向かうという価値観づくり、基盤づくりをやらせていただくつもりです」

—5年先、10年先の具体的なビジョンについて今、約束できることは？

浅田「現時点では何年後にどこまでという約束はできません。先ほどから申し上げているUCIプロチームができた段階で具体的な目標を言わせていただきます。今はそうした強い選手の受け皿づくりに向かって努力を続けていくということです。ただし、同時並行的に若手選手の強化ということも推進中です。若手有望選手が強くなり、次のステップを目指



2018 ジャパンカップクリテリウムの迫力あるゴールスプリント (高橋秀明氏撮影)

するための受け皿を構築できた時こそ明確な目標を打ち出す時です。今は枠組みづくりが最優先事項です」

栗村「確かに世界に向かうための枠組みづくりを何としてでも実現しなければなりません。これは日本のロードレース界発展への絶対条件です。才能があり、やる気がある選手を集め、鍛え、日本を代表するナショナルチームに送り込む。そんなコンセンサスに対する理解の輪を広げ、具体的な動きとして結実させていく覚悟です。そうした機運が高まっていかなければ日本ロードレースの発展は望めません。それが3年先なのか、5年かかるとか、10年かかるのかはわかりませんが、そうした体制づくりに向かって最大限の努力を惜しむつもりはありません」



2019年、雨中の全日本ロードは入部(右端)が新城に競り勝って優勝した

浅田「それと今まで日本人にこだわったチームづくりをしてきましたが、最近そこにこだわらなくてもいいのではないかと考えるようになりました。重要なのは日本人選手が成長することです。国際日本人選手の強化にプラスするならば、**日本人選手の強化にプラスするならば、チームに外国人選手を加入させるのも問題なし!**

社会の中で成長し得る日本人選手を育成するべきです。ひとつのチームとしてとらえ、その中で日本人であれ、外国人であれ、公平に扱い、単純に強い、弱いではないでしようか。そういう活動ポリシーの中で日本人選手が育ち、強くなっ

ていく方法を探してもいいのではないかと思います」

栗村「チームに外国人選手がいても問題ないですが、日本人選手が強くなっているかと駄目です。外国人選手を加えることで日本人選手のレベルアップをはかっていくことが大切です。どの道、世界に飛び出せば外国人選手と闘うわけですから、日本人選手はチーム内の競争に負けているわけにいかないんです。心身ともにタフな日本人選手を育成していかなければなりません。日本人選手は国内のレースではほとんど積極的に逃げるとか、小さくまとまらずに世界を意識した走りを実践していったほうがいいですね」

栗村「私は今年で50歳という節目を迎えるのですが、これから何ができるのか、何をすべきなのか悩むことも多くなりました。野球で言えば難しい球が来て、それを打ち返せなくてファウルしている。そんな感じですか。」

しかし、諦めないために悩んでいるわけであって、私の後に続く世代に残すべきものを残していきたい。そのため全力投球していく覚悟を固めています」

浅田「自分が取り組んできたことを今後自信を持ってやっていきたい。それだけです」